

異文化における民族アイデンティティの顕在化

—日本人留学生を対象とした縦断調査による質的検討—

植 松 晃 子

お茶の水女子大学グローバル COE プログラム

「格差センシティブな人間発達科学の創成」

PROCEEDINGS 04 Grant-In-Aid Research Awards

(公募研究成果論文集 2007 年度第二集)

異文化における民族アイデンティティの顕在化 —日本人留学生を対象とした縦断調査による質的検討—

植松 晃子
(人間発達科学専攻)

問題と目的

2006年度、増加を続けていた海外在留邦人数は106万人を越えた(外務省領事局政策課, 2007)。海外滞在者数の増加に伴い、海外不適應の問題も増え(阿部, 2001)、心理学の分野でも異文化間カウンセリングが注目されてきている(白土, 2004)。また、海外で生活する日本人のうち、留学生は不適應が最も多い群と指摘され(稲村, 1980)、過去に心身面の問題から犯罪まで、幅広い事例が報告されている(上田, 1977; 近藤, 1981)。さらに11年に渡るフランスの邦人を対象とした精神科臨床の累計調査においても、留学生の受診が全体の約26%を占めており、最も多い(鈴木・立見・大田, 1997)。

異文化における心理的不適應について、山本(1984)はバイカルチュラルな生育歴を持つ青年が自分の存在が根付くところを求めて迷走した例から、鍵概念としてのアイデンティティの問題を指摘している。また栗原(2004)は、学校専任のカウンセラーとして、700人以上の帰国子女と外国人生徒、また国際結婚をした両親の子ども達との面接を通して、異文化接触が否応なしにアイデンティティを意識させる状況であると指摘している。

多くの場合アイデンティティの問題は、自分の存在を確認する必要に迫られる際に特に重要になる(黒木, 1996)。アイデンティティ概念を提案したErikson(1959)は「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の相補性を指摘しているが、複数の文化・民族が存在する環境で生活する際には、文化や民族に関わる「集団アイデンティティ」が重要になるとされる(Phinney, 1990; 井上, 1993)。そして、海外の先行研究ではこのような「集団アイデンティティ」として、民族アイデンティティが注目されている。

(1) マイノリティ青年の民族アイデンティティ研究

民族アイデンティティはマイノリティ青年にとって重要

なアイデンティティの一側面であるとされている。初期の民族アイデンティティ研究は、African-Americanなど特定の民族集団を対象に研究が進んだが、その後Phinney(1989, 1990, 1992)によって、民族の枠を越えた普遍的な発達モデルが検討された。この議論の中でMarcia(1966)によるアイデンティティ・ステータス研究の基準を応用して(1)自分の民族性の「探索(exploration)」と(2)自分の民族性への「愛着・所属感(affirmation/belonging)」(もしくはコミットメント(commitment; Phinney & Ong, 2007 a))が、様々な民族に共通の民族アイデンティティ発達の構成要因として整理された。

(2) 日本人の異文化体験と民族アイデンティティ

日本人の民族アイデンティティ研究は少ないが、先述の構成要因を用いて推察すると、日本国内では先行研究における多民族社会のマジョリティ青年と同じように、自分の民族性への関心が低く(1)探索も(2)愛着・所属感も低い群の特徴を持っている可能性がある。つまり国内での民族アイデンティティは重要な「集団アイデンティティ」の一領域にはなっておらず、日常的に意識する場面も少ないのではないだろうか。

多くの日本人の場合、異文化体験は多文化環境の体験になるだけでなく、マジョリティからマイノリティへの属性移行を伴っている。こうした環境の移行は自分の民族・文化的背景に関連する「集団アイデンティティ」への焦点化を促すことになるのではないだろうか。すなわち国内では沈潜していた民族アイデンティティが先行研究のマイノリティ青年と同じように顕在化する可能性がある。マイノリティ青年を対象とした海外の先行研究からは、民族アイデンティティは適応感や自尊心とのポジティブな関係が見いだされている(e.g., Roberts, Phinney, Masse, Chen, Roberts, & Romero, 1999; Yip & Fuligni, 2002; Lee & Yoo, 2004; Yasui, Durham, & Dishion, 2004)。したがって、異文化体験によって民族アイデンティティに焦点が当たるようになるのかどうかを明らかにしておくことは、

今後、異文化での心理的サポート要因を検討する際や、異文化でのアイデンティティの揺らぎを解釈する際に寄与する基礎的な知見になると考えた。また先行研究においてマジョリティ青年は民族アイデンティティを事実以上に意識をしておらず、民族アイデンティティ・ステータスの評価が特に難しいと指摘されている (Phinney, 1989)。よって本研究では、民族アイデンティティのあり方について、より詳細に吟味しながら環境の移行による変化を捉えるために、調査方法としては半構造化面接法による検討を行うこととした。

以上のように、本研究では縦断調査を行い留学前と後の半構造化面接のインタビューデータを分析することによって、異文化で日本人青年が自分の民族性に着目し、民族アイデンティティが顕在化するのかどうかを明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者

日本人交換留学生 25 名である (男性 8 名、女性 17 名 / 平均年齢 20.5 ($SD=.77$))。留学先は、アメリカ 10 名、イギリス 6 名、ドイツ 2 名、ポルトガル 2 名、フランス 2 名、イタリア、スペイン、中国各 1 名であり、1 年以上の海外滞在経験がある帰国子女 11 名であった。また平均留学期間は 10.4 ヶ月 ($SD=.83$) である。

調査方法

関東圏の大学において、交換留学の窓口となる国際センターや国際交流課に依頼し、調査協力者をポスター掲示によって募集し、留学前のインタビューを出国前 1 ヶ月以内、留学後のインタビューを帰国後 1 ヶ月以内に行った。

質問内容

半構造化面接を実施するにあたり、民族アイデンティティ発達の構成要因 (Phinney, 1992; Phinney et al., 2007 a) にもとづき、質問項目を作成した。構成要因は、自分の民族集団についての「探索」と「愛着・所属感」からな

る。「探索」と同様に「愛着」は「所属感」が前提となっているが、それぞれは別の内容であると考え、本調査では「愛着・所属感」は「愛着」と「所属感」に分けて尋ねた。よって「所属感」は「自分が日本人であると意識していますか」と尋ね、「愛着」は「日本や日本人であることに愛着・誇りはありますか?」、「探索」は「日本や日本人について知ろうとしたり、学んだりしたことはありますか?」と尋ねている (Table 1)。全ての質問において、インタビュアーは意識する場面や愛着を持つ対象、及び探索経験がどのように行われたのかについて自由に語ってもらい、内容についてはできるだけ具体的にできるように心がけた。

コーディング方法

インタビューデータは逐語化し、民族アイデンティティに対してインタビュー調査を行っている Phinney, Jacoby, & Silver (2007 b) の基準を参考に、民族アイデンティティ・ステータスに分類した。さらに分類の際には、各ステータスの特徴を明確にしたうえで、どのステータスに分類するのかがより明らかになるように、はじめに上記の質問内容の 3 側面について 1 点から 3 点に評定し、次にその評定をもとに客観的な指標を合わせて質的なステータスの分類が出来るようにした。さらに逐語データは、植松と心理学系の大学院生 2 名によって評定され、その評定にもとづいて分類を行った。ケンドールの一致係数は、留学前が $\kappa=.81$ ($p<.001$)、留学後は $\kappa=.79$ ($p<.001$) となっている。不一致の部分は、評定者間の協議によって解決した。以下に詳しい手順について述べる。

手順 1) 意識 (所属感)・愛着・探索の 3 側面の評定

評定は質問内容ごとに行うが、例えば「所属感 (意識)」についての質問に答えているプロトコルであっても「愛着」や「探索」に関連する言及がある場合は、質問内容の枠にこだわらず、参考にして評定した。

(1) 意識 自分の民族性への「所属感 (意識) がある」というのは、自分にとって重要な社会集団として自分の民族性を認識しているかどうかに関わる点であるため、単なる事実以上に認識されている場合には、高い段階で評定さ

Table 1 民族アイデンティティに関する主な質問内容

構成要因	質問内容
所属感 (意識)	自分が日本人であると意識していますか? それはどういう場面ですか?
愛着	日本や日本人であることに愛着・誇りはありますか? それはどのようなものですか?
探索経験	日本や日本人について知ろうとしたり、学んだりしたことはありますか? どのような体験でしたか?

れる。「所属感（意識）がない」場合というのは、自分が日本人であることを意識したことがない場合や、めったに意識しないもの、および関心がないものとした。

(2) **愛着** 自分の民族性への「愛着がある」というのは、自分が日本人であることや、日本の持っている文化・社会的側面、及び日本人の持っている性質などに対する愛情や誇りなどの感情が見られる場合である。さらに同一化の対象となる領域（ここでは民族性）への積極的関与（commitment）の指標として、その領域に何らかの感情を持っていることが考えられる。よってアンビバレンスな感情や嫌悪など否定的なものであっても、評価に入れている。よって「愛着がない」と評価されるものは、自分が日本人であることや日本の文化・社会、および日本人の性質などについて、特に関心がなく、感情を持たないものとなる。

(3) **探索** 「探索経験がある」というのは、自分の民族性に対して積極的な関心を持ち、それらをより深く理解するために行動しているもの、もしくは過去にしてきたものである。義務教育及び高等教育における日本史の受講については、それを特別なものとして本人が認識していない限り、探索経験には含まなかった。また「これから勉強しよ

うと思っている」といった予定は「探索経験なし」とした。よって「探索経験なし」に評価されるものは、これまでに民族性を理解するための行動をしたことがないものとした。以上の基準をもとに、評価は1「なし」、2「ややある」、3「ある」の3段階で行った。Table 2には、3側面の評価基準とプロトコル例を示した。なおプロトコル例は、匿名性の問題から、あまり具体的な言葉は別の抽象度の高い言葉に言い換え、内容が変化しないように注意しながらまとめられている。

手順2) 民族アイデンティティ・ステータス分類

次に、手順1の評価にもとづいて、民族アイデンティティ・ステータスに分類する。民族アイデンティティ・ステータスについては、Phinney et al. (2007 b) を参考にした。ただし、本研究の対象は、留学生という一時的滞在者であり、留学によってマジョリティからマイノリティへの移行、及び異文化接触を経験するため、この研究が対象とするアメリカに在住のマイノリティ・マジョリティ青年とは異なっている。よって本研究の対象者において適切な分類について、以下のように検討した。

Table 2 民族アイデンティティ 3側面についての評価基準

	評価基準	プロトコル例
意識あり	自分が日本人であることを、単なる生まれや事実以上のものとして、意識している	「しますね。私は結構、人に頼ってしまったりとかするんですけど、日本人ばいと思います。気を使う時とか (case 3)」 「常に意識しているかな。日本人とアメリカ人を比べたら、感覚として日本人にしか分からないことがあると思うんですよ。そういうのが理解できるのは日本人だけかなと思ったり (case 20)」
意識なし	自分が日本人であることを意識したことがない。事実であること以上にとらえていない。及び関心が少ない	「考えたことないですね。ただ単に日本人だと思ってます (case 7)」 「結構留学先で意識するんじゃないかな。今は特に思っていないんですけど (case 16)」
愛着あり	自分が日本人であることや、日本人・日本文化などへの肯定的感情がある（否定的な感情でも可）	「小さい時から接している日本の文化には愛着があります。例えばお盆に祖母の家に行ったりとか、お祭りとか (case 2)」 「愛着はあるんですよ。でもそれが他より劣ってるんじゃないかって思うんです。ネガティブなところがある (case 12)」
愛着なし	自分が日本人であることに特別な感情は持たない	「プラスマイナスゼロ。どうでもいいよという感じですね (case 9)」 「今は結構留学先に早く行きたいかな。そこまで日本人だよ私とか、愛着を持っていませんね (case 16)」
探索あり	日本人・日本文化・日本の歴史などへの。関心から、それらをより詳しく知るための行動をしている・した（日本史の授業については、特別なものとしての言及がない限り、探索経験には含まない）	「中学の歴史の授業からすごく日本に興味を持って、そこから始まったんですね。日本を知るといいますか。戦国時代が好きだったんですけど、その時代の美学にすごく興味があって (case 13)」 「大学に入ってから、日本人だんだんからもっと日本人のことを理解しているも良いじゃないと思って、好きなんですよ文学とか。あと旅行に行ったり (case 15)」
探索なし	日本人・日本文化・日本の歴史などへの。関心が薄く、それらをより詳しく知るための行動をしていない・したことがない	「う～ん、特にはないですね (case 2)」 「特に日本の歴史をテレビで見るとはいいですかね。特にそれを勉強したことはないです (case 4)」 「機会があったらやってみようかなって。茶道とか (case 23)」

注：プロトコル例は全て留学前のものに統一して示した。

Table 3 本研究の民族アイデンティティ・ステイタス分類基準

ステイタス	意識評定	愛着評定	探索評定	評価基準
無検討	1~2	1~2	1	自分の民族性にあまり関心がなく、探索経験もない
早期完了	2~3	2~3	1	日本人としての意識、愛着はあるが、探索経験はない
モラトリアム	2~3	2~3	2~3	日本人としての意識、愛着があり、且つ探索経験がある ※愛着の質はネガティブな場合もある

Table 4 留学前・後の評定の平均値・標準偏差、対応のある *t* 検定結果

	留学前 N=25		留学後 N=25		<i>t</i> 値
	平均	SD	平均	SD	
意識 (所属感)	1.88	(.78)	2.56	(.58)	-4.33*** 留学前<後
愛着	1.96	(.53)	2.68	(.55)	-5.31*** 留学前<後
探索経験	1.64	(.90)	2.64	(.70)	-4.88*** 留学前<後

注) *** $p < .001$

民族アイデンティティ・ステイタスには「民族アイデンティティ達成 (achieved ethnic identity)」というステイタスがある。これは、自分の民族性を豊かに理解するための努力をしたことがあり、そうした理解に基づく明確な所属感を持っている、もっとも成熟した段階とされる (Phinney, 1989; Phinney et al, 2007 b)。しかし本研究の対象者は、海外滞在期間が1年程度の交換留学生であるため、ステイタス分類の中にこのような時間をかけた民族性の理解の積み重ねによって得られる、安定した状態を示す段階を設定することは適当でないと考えた。そこで本研究では「民族アイデンティティ達成」はステイタスの分類段階に含まず、アイデンティティの再構成過程としての有意義な猶予期間にあることを示す「民族アイデンティティモラトリアム (moratorium)」までの3つのステイタスを明らかにすることとした。

また、Phinney et al. (2007 b) は分類のための基準として「民族アイデンティティモラトリアム」を「民族アイデンティティ達成」と明確に区別するために、自分の民族集団への所属感や愛着が示す「積極的関与 (commitment)」がなく、探索経験があるものとしている。しかし Marcia (1966) によると、「モラトリアム」の性質は、ある領域に積極的に関与しようと奮闘している状態である。よって同一化対象への関わり方が曖昧でアンビバレントなことがあるが、全くない状態を示してはいないため、本研究では自分の民族性に対して何らかの愛着があり、探索経験があれば、それを「民族アイデンティティモラトリアム」として分類することにした。

よって本研究で用いる分類は、「民族アイデンティティ無検討 (ethnic identity diffuse)」：自分の民族性への

意識、愛着が低く、探索経験がないものである。「民族アイデンティティ早期完了 (ethnic identity foreclosure)」：意識や愛着はあるが、探索経験がないものである。そして「民族アイデンティティモラトリアム (ethnic identity moratorium)」：自分の民族性への意識や愛着が高く、同時に探索経験を現在行っている、もしくは過去に行ったことがあるものとなる。本研究のステイタス分類基準のまとめは Table 3 に示す。

結果

1) 3側面の評定による検討

はじめに、「意識」、「愛着」、「探索経験」の3側面について、質的な評定による得点化を行い (range: 1-3)、対応のある *t* 検定を行った。結果、全ての側面について留学前と留学後の間に有意な差が明らかになった。結果を Table 4 に示す。この結果は、留学という異文化経験を通して、日本にいた時よりも自分が日本人であることについての意識、肯定的感情、探索経験を行うものがいずれも増えたことを意味する。異文化環境において、国内ではあまり意識しなかった「日本人としての自分」の民族性に気づき、より肯定的な感情を持つものが増えることが示され、また探索経験といった民族性に対するより深い理解のために学ぼう体験が増えたことが推察できる。

2) 民族アイデンティティ・ステイタス分類による検討

民族アイデンティティの3側面について評定した基準をもとに、アイデンティティ・ステイタスの分類を行った。留学前に「民族アイデンティティ無検討」に分類されたも

Table 5 留学前後のステイタス分類の内訳（人数）

ステイタス	留学前	留学後
無検討	6 (3) 12.0%	0 0.0%
早期完了	12 (4) 24.0%	5 (2) 10.0%
モラトリアム	7 (4) 14.0%	20 (9) 40.0%

注：（ ）は1年以上の海外滞在者数

Table 6 民族アイデンティティ・ステイタス「無検討」の Protokol 例

無検討	
留学前	意識：「していると思います。でもどうとも思っていないかな」（評定1） 愛着：「日本人であること自体に特に愛着はないですけど」（評定1） 探索：「自分が育った環境や文化については自分の要素にはなっていると思うので、理解しておきたいとは思いますが。う〜ん、学校でやる程度ですね」（評定1） …（Case 1）
留学後	該当なし

注：Protokol 例の後に（評定1〜3）を記入

Table 7 民族アイデンティティ・ステイタス「早期完了」の Protokol 例

早期完了	
留学前	意識：「常に意識しているかな。日本人とアメリカ人を比べたら、感覚として日本人にしか分からないことがあると思うんですよ。そういうのが理解できるのは日本人だけかなと思ったり」（評定3） 愛着：「あります。日本人独特の感じ当りか。大事にしようと思っている」（評定2） 探索：「学んだことは別に全然ないです。なんとなくです。」（評定1） …（Case 20）
留学後	意識：「もちろん自分は日本人なんだけど、意味がない。カリフォルニアは人種が全部混じってるから、関係ないんです、」（評定2） 愛着：「面白かったのが、松井がホームラン打ったりするとすごく嬉しい。だから愛着は感じますね。優劣はないと思うけど」（評定3） 探索：「あまり考えなかったけど、自分もあそこにいる人も日本人だし。ただ日本人だって分かっているけど、どうって事ないよ、単に事実以上ではない。自分が生活する範囲ではこういう考え方でやっていけると思っています」（評定1） …（Case 9）

注：Protokol 例の後に（評定1〜3）を記入

のは6名、「民族アイデンティティ早期完了」に分類されたものは12名、「民族アイデンティティモラトリアム」に分類されたものは7名であった。また留学後には「民族アイデンティティ無検討」に該当するものはいなかった。留学後に「民族アイデンティティ早期完了」に分類されるものは5名、「民族アイデンティティモラトリアム」に分類されるものは20名であった（Table 5）。本研究の対象者には、帰国子女を含む1年以上の海外滞在経験があるものが11名含まれているが、留学前の分類では「無検討」が3

名、「早期完了」が4名、「モラトリアム」が4名であった。過去に海外に長期滞在した経験を持つものでも、必ずしも現在の民族アイデンティティの顕在化につながるものではないことが示唆されるが、おそらく滞在した時期や現地での生活状況によっても異なると思われる。本研究では対象が少ないこともあり、長期滞在外者においては人数を記述するととどめ、詳しい検討は行っていない。それぞれのステイタスのProtokol 例は Table 6、Table 7、Table 8 に示す。

Table 8 民族アイデンティティ・ステイタス「モラトリアム」の Protokol 例

モラトリアム	
留学前	意識：「しています。私は変なところで遠慮しているところがあるんですが、そういうはっきりいえないところが日本人だなんて思います」（評定3）
	愛着：「あります。親を大事にしている面は日本的で、そういうところは好きですね。血縁を大事にするところが」（評定3）
	探索：「どうしてこんなに曖昧な言い方をするんだらうって、日本語の微妙な表現の違いが気になって、関連する本を読んだことがあります。あと、日本人はこういう民族だとか、日本人の特徴について書かれた本を読んだり。曖昧さが嫌な時期があって、日本語の。何でこんなに曖昧なんだらうって使うたびに思っている」（評定3）
… (Case 5)	
留学後	意識：「日本人に話しかけて、日本人だなんて思いました。期間の後の方が、だんだん意識するようになるというか、自覚するようになる」（評定2）
	愛着：「あります。誇りは、人と文化。もし否定されるものでも私は良いと思うんですよ。意見をはっきり言わないとか、生魚を食べるとか、やっぱり変に思われる。でも食文化は世界一だと思えます。最近それは勉強していて、栄養学とかやっていると、良いものとされているものが日本には一杯ある」（評定3）
	探索：「歴史の話になると意識するんですけど、日本人であることに責任を持ちたいと思います。以前は偏見があるより無知が良いと思っていたけど、世界の中で自分の存在をしらないようなものだと思う」（評定3）
… (Case 8)	

注：Protokol 例の後に（評定1~3）を記入

カイ2乗検定の結果、有意差が明らかになった ($\chi^2 = 15.142, df=2, p<.01$)。留学期間を通して、自分の民族性に無関心で「無検討」のままのものはなかった。また「民族アイデンティティ早期完了」群が減少し、「民族アイデンティティモラトリアム」群が増加したことから、留学期間を通して、自分の民族性についてより深く知ろうとする経験が増え、自分の民族性をより明確に意識するものが増えていると言える。よって本調査の結果からは、異文化体験を経て、国内にいる時よりも民族アイデンティティが顕在化することが示唆される。

留学前から、「民族アイデンティティモラトリアム」に分類されるものも約3割いたが、Protokolの内容を比べると、留学前の探索経験は本や比較文化の授業などメディアを通じた間接的なものであり、留学期間の探索経験は実際の体験が中心に語られた点で、留学後の内容とは違いが見られている。「民族アイデンティティ早期完了」には留学前と後とで内容の特徴にこのような違いは見られなかった。

考 察

本研究は日本人青年の民族アイデンティティが留学という異文化体験の中で変化するのかどうかを明らかにするために、縦断調査を行った。留学は一時的な海外滞在であり、先行研究で対象となってきたマイノリティ青年とは異なる

環境にあると思われる。特に本研究で対象になったのは、約1年の交換留学生であった。しかし留学という異文化体験は、多くの日本人にとって多文化・多民族の中で生活するというバイカルチュラルな体験であると同時に、マイノリティ体験を伴っている。したがってこのような環境の中で生活する場合には、自分の民族性に着目し、より深く理解するようになる可能性が推察された。また海外の研究では民族アイデンティティが多文化・多民族環境において重要な側面を持つことが明らかになっており、心理的な健康と関連があるものとされている。よって年々増加する日本人留学生でも、民族アイデンティティについて検討することが必要であると考えた。

調査の結果、日本人青年の民族アイデンティティに関して、留学後の評定は有意に高くなっており、民族アイデンティティ・ステイタスは「民族アイデンティティモラトリアム」に分類されるものが7名から20名に増加していた。この結果は、約1年という海外滞在経験でも自分の民族性を意識し、それをより深く知ろうと探索したものが多かったことを示している。また、自分の民族性を意識するきっかけとしては、先行研究で指摘されたように、文化的差異を感じる場面のようなバイカルチュラルな体験、さらに日本人という特別な外国人として注目される場面のようなマイノリティの体験が多くあげられており、よって一時的な海外滞在であっても、日本を離れ異文化で生活することは、自分の民族性をより意識させ、民族アイデンティティを顕

在化させると考えてよいだろう。

本研究では異文化体験によって、日本人青年であっても民族性に焦点が当たる可能性が示されたが、滞在先で自分の民族性をより意識するようになることは、異文化という新たな視野を入れたところで、その特徴について再発見することになる。そして、その再発見に対する情緒的な反応はポジティブ、ネガティブ両面の可能性があると思われる。本研究の対象者は自分の民族性を肯定的に捉えるものが多く、特に「民族アイデンティティモラトリアム」群においては、肯定的な「所属感」や「愛着」と民族性の理解を志向する「探索経験」には相関があるように見受けられる。しかし自分の民族性へのアンビバレントな感覚は、本研究の対象となった留学生の言及にもある程度見られている。多くの日本人にとって、異文化体験はバイカルチュラルの体験およびマイノリティ体験につながっているが、こうした状況は同時に「集団アイデンティティ」の葛藤や混乱を生じさせるリスクを含んでいる。例えば、Erikson (1964) は「根こぎ感 (up-rootedness)」と名付けているが、それまでに馴染みのあった社会集団から切り離され自分の「根」を失うと、自我機能や「自我アイデンティティ」の感覚を弱め、抛り所の無い不安感を引き起こし、ひどい場合には精神疾患につながる可能性がある。海外在住の日本人でもこの問題は指摘されている。例えば、海外移住を契機として、母国とその文化を失うことへの根こぎ感が生じ、精神的危機を招いた日本人女性の事例がある (江畑, 1982)。事例は極端な例であるとしても、異文化において自分がこれまで持っていた「集団アイデンティティ」に対する再発見は、特にネガティブな時には異文化体験に伴う心理的なリスクになる可能性がある。また「エスノセントリズム (ethno-centrism)」のように排他性を伴うような過度にポジティブな反応も、異文化での生活における何らかの心理的なリスクとして捉えたほうが良いだろう。

今回、異文化における民族アイデンティティが、国内にいるときより顕在化することが示されたことにより、異文化で心理的な混乱や葛藤が生じた際に、民族性を基盤にした「集団アイデンティティ」に関するアセスメントや介入が有効なアプローチになる可能性が示唆される。先行研究では、民族アイデンティティはマイノリティ青年にとって、適応感や自尊心など心理的健康との関連が示されている。また Erikson (1959) では「集団アイデンティティ」と「自我アイデンティティ」の関連が提案されている。従ってもし異文化で民族アイデンティティに葛藤や混乱が見られる場合 (例えば、過度な同胞集団への嫌悪、根こぎ感を引き起こす可能性がある滞在先への過剰適応、及び排他性をもった過度にナショナリズム的思考など) には、留学生の心理的健康や「自我アイデンティティ」の感覚が弱ま

っている可能性があり、この「集団アイデンティティ」の領域 (民族アイデンティティ) に明確さや安定を取り戻すプロセスが、有効な心理的サポートのプロセスになる可能性がある。本研究の結果だけでは限界があるが、今後異文化での民族アイデンティティのあり方についてさらに調査し、適応感や心理的健康、また「集団アイデンティティ」と相補的な関係があるとされる「自我アイデンティティ」 (Erikson, 1959) と民族アイデンティティとの関係を検討していくことは、日本人留学生の心理的サポートの方向性を探るために有意義なものになるのではないだろうか。

今後の課題

本研究は 25 名の日本人交換留学生を対象として、彼らの民族アイデンティティについて検討してきたが、人数の限界から国ごとに特徴を明らかにすることや、生活環境の違いによる分析が出来なかった。また、異文化環境であっても民族アイデンティティがさほど顕著にならない群 (「探索経験」が少ない早期完了群) が存在しており、このような違いがどうして起こるのかを探るためにはさらに対象を増やし、民族アイデンティティ・ステータスごとにさらに詳細に検討することが必要であろう。また 1 年以上の留学生や、帰国子女など別の対象群への調査を行い、学習環境の個別の要因を明らかにしながら検討し、データを重ねていくことが、異文化における民族アイデンティティのあり方や、心理的サポートのための役割をさらに明らかにしていくために必要であると考えられる。

(文献)

- 阿部 祐. (2001). 多文化間メンタルヘルスの動向と実践. 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 5, 1-7.
- 江畑敬介. (1982). 日系移民分裂病者の発病過程と病状変遷—民族同一性の視点から—. 季刊精神療法, 8, 53-60
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and Lifecycle*. New York: Norton.
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton.
- 外務省領事局政策課. (2007). 海外在留邦人数調査統計 平成 19 年最新版. 国立印刷局
- 稲村博. (1980). 日本人の海外不適応. 東京: 日本放送出版協会.
- 井上果子. (1993). 複数文化を体験した青年の多重アイデンティティ: 少数民族の“共有された否認 (shared denial)”について. 精神分析研究, 37, 85-95.
- 近藤裕. (1981). カルチャー・ショックの心理: 異文化と付き合うために. 大阪: 創元社.
- 栗原真弓. (2004). 異文化間カウンセリングを実施するうえでの留意点: 帰国児童生徒への臨床を通して. 異文化間教育, 20, 11-19.
- 黒木雅子. (1996). 異文化論への招待. 大阪: 朱雀書房.

- Lee, R. M. & Yoo, H. C. (2004). Structure and measurement of ethnic identity for Asian American college students. *Journal of Counseling Psychology*, 51, 263-269.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego Identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Mollines, J. (1980). Construction of black consciousness measure: Psychotherapeutic implications. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 17, 458-462.
- Phinney, J. S. (1989). Stage of ethnic identity development in minority group adolescents. *Journal of Early Adolescence*, 9, 34-49.
- Phinney, J. S. (1990). Ethnic identity in adolescents and adults: review of research. *Psychological Bulletin*, 108, 499-514.
- Phinney, J. S. (1992). The multigroup ethnic identity measure: A new scale for use with diverse groups. *Journal of Adolescent Research*, 7, 156-176.
- Phinney, J. S., & Ong, A. D. (2007 a). Conceptualization and Measurement of Ethnic Identity: Current Status and Future Directions. *Journal of Counseling Psychology*, 54, 271-281.
- Phinney, J. S., Jacoby, B., & Silver, C. (2007 b). Positive intergroup attitudes: The role of ethnic identity. *International Journal of Behavioral Development*, 31, 478-490.
- Roberts, E. R., Phinney, J. S., Mase, L. C., Chen, Y. R., Roberts, C. R., & Romero, A. (1999). The Structure of ethnic identity of young adolescents from diverse ethnocultural groups. *Journal of Early Adolescence*, 19, 301-322.
- 白土悟. (2004). 異文化間カウンセリングの今日的課題. 異文化間教育, 20, 4-10.
- 鈴木満・立見康彦・太田博昭 (編). (1997). 邦人海外渡航者の精神保健対策: 欧州地域を中心とした活動の記録. 東京: 信山社.
- 上田宣子. (1977). 異国体験と日本人: 比較文化精神医学から. 大阪: 創元社.
- 山本 力. (1984). アイデンティティ理論との対話: Erikson における同一性概念の展望. 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (編)、アイデンティティ研究の展望 I (pp. 9-38). 京都: ナカニシヤ出版.
- Yasui, M., Durham, C. L., & Dishion, T. J. (2004). Ethnic identity and psychological adjustment: A validity analysis for European American and African American Adolescents. *Journal of Adolescent Research*, 19, 807-825.
- Yip, T. & Fuligni, A. J. (2002). Daily variation in ethnic identity, ethnic behaviors, and psychological well being among American adolescents of Chinese descent. *Child Development*, 73, 1557-1572.

謝 辞

本論文を執筆するに当たり、お茶の水女子大学の内田伸子先生、慶応義塾大学の伊藤美奈子先生には数々の貴重なご助言を頂き、お茶の水女子大学の森美香先生からは丁寧な指導を賜りました。記して深く感謝申し上げます。

またお忙しい留学期間を通してご協力頂いた調査協力者の皆様に、心から御礼申し上げます。

Ethnic Identity in Cross-cultural Situation: A Longitudinal Study about Japanese Students Abroad

Akiko UEMATSU

(Human Developmental Sciences)

Changes of ethnic identity were assessed through in-depth interview with 25 Japanese students abroad (m=8, f=17; mean age=20.5) as exchange student. The interview was a revised version of the interviews used of the components of ethnic identity development (Phinney, 1992; Phinney & Ong, 2007) and ethnic identity status (Phinney, Jacoby, & Silver, 2007). It was based on the interviews employed in ego identity research (Marcia, 1966). Participants were interviewed individually before they went to abroad and after they came back. On the basis of the interviews, subjects were coded as being in score (range:1-3) and one of three status: (1) individual as unexamined ethnic identity status shows little interest in or understanding of their ethnicity, and has made no effort to learn more about it, (2) individuals as ethnic identity foreclosure status express attachment and sense of belonging, but there is no evidence of exploring the meaning of their ethnicity for themselves, (3) individuals as ethnic identity moratorium status have engaged or are currently engaging in an effort to learn about their ethnicity and understand it, but sometimes they remain unclear about it or express ambivalence about belonging to the group. After they came back to Japan, all their components of ethnic identity score ("sense of belonging", "affirmation" and "exploration") were significantly higher than before. Also, many participants changed their ethnic identity status as moratorium status ($\chi^2=15.142$, $df=2$, $p<.01$). A lot of studies in abroad have revealed that ethnic identity was important for minority adolescents, and it was related to their self-esteem, and social well-being. The result of this longitudinal study shows ethnic identity of Japanese students abroad were more salient in cross-cultural situations. Therefore, it suggests that ethnic identity could be significant factor of mental health support also for Japanese adolescent in another country. Further researches are needed to examine ethnic identity more clearly and to explore the relationship between ethnic identity and mental health factors like ego identity which has mutual complementation with group identity (Erikson, 1959) or self-esteem and so on.

Keywords: Cross-cultural situation, Japanese students abroad, ethnic identity, longitudinal study